

キャンパスマスタープランで捉える大学施設の活用

小篠 隆生

(北海道大学大学院工学研究科 准教授)

一 大学施設活用の視点

「大学の施設・設備を活用する」というのが、筆者に与えられたテーマであるが、本稿では大学施設単体を捉えてその機能を教育・研究にだけ限定するという見方ではなく、本来、大学キャンパスという空間に立地する大学施設は、どのような活動を想定して創られなければならないのか、またその上でどのような利活用の視点を持たなければならないのかという切り口で小論を展開したい。

そのような視点で見た時に、大学キャンパスで活動する学生、教職員が良質なアメニティを享受して研究・教育に

専念することができる、国内の大学でも独自性の高い環境を持つ北海道大学を事例として取り上げる。

二 二つのキャンパスマスタープランが目指したこと

北海道大学は、一九九七年二月に最初のキャンパスマスタープラン96(以降CMP96)を策定した。これは、二一世紀に向けた大学の未来像を現実化するためには、教育研究内容に相応しい長期的観点に立った施設整備が必要であることから、将来構想を踏まえた施設整備の基本方針を定めたものである。当時の国立大学としては、既存キャンパ

スのマスタープラン策定の先駆けとなり、その後の国立大学に大きな影響を及ぼした。

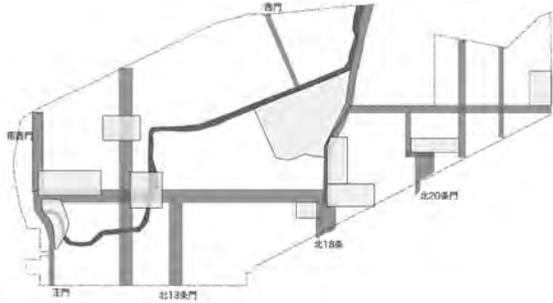
その後一〇年が経過し、様々な環境の変化に対応するために、二〇〇七年三月にキャンパスマスタープラン2006(以降CMP2006)を策定した。ここでは、CMP96の骨子を継承するとともに、様々に変化する大学の役割や組織に対応したキャンパスの空間を整備することにより、持続的な発展を可能にすることと、同時に大学運営に資するために変化に柔軟に対応する施設・環境のマネジメントを重視した計画づくりを行なった。

CMP96の計画骨子は、①研究・教育する「人間」の場としてのキャンパス、②社会との関連を持たせたキャンパスへの展開、③都市の中の都市としてのキャンパス、④固有のランドスケープの継承、⑤歴史的キャンパス構成の継承と展開、⑥国際的研究、競争が行なえる施設・環境づくり、という六つの項目であり、その中の「研究・教育する『人間』の場としてのキャンパス」に対しては、CMP2006で加えられた新たな視点として、「豊かで質の高いキャンパスライフを提供できる環境づくり」といった項目が加えられた。

三 キャンパス空間におけるパブリックスペースの役割

キャンパス内での活動は、大きく二つに分けることができる。一つは、カリキュラムに定められた教育・研究を行なう時間であり、それを行なう施設である。しかし、これだけで大学における活動が成立しているのではない。授業や演習がすべての時間で開講しているわけではない。授業活動などは、いつ何をどのようにどこで行うのかということは、全てその活動の目的に応じて最適な場所で行なわれていく。大学が他の教育機関と大きく違うところは、このようにあらかじめ決められた教育・研究活動をスケジュール通り行なうことだけを目的として施設の機能や立地を考えることができないということである。そこで二つ目として考えられる活動は、様々な異なる専門を持った教員や学生、さらには大学に訪れる外部の人々との交流である。それによって新しい知は創造されるのであり、そういった創造活動は、むしろカリキュラム以外の時間(オフ・カリキュラム)で起こる場合が多い。

オフ・カリキュラムを過ごす空間とは、教育・研究活動を行なう施設が中心になるだけでなく、キャンパスの中



キャンパスの重要なコアとしてパブリックスペースを位置づける

図2 地区・街区スケールのガイドライン

この骨格軸の内容は、ほぼ道路と沿道の空間、さらにキャンパスを縦断している河川といったもので構成される(図1)。

(2)地区・街区スケール／キャンパス全体の骨格軸に付随させて、大学キャンパスにおけるオフ・カリキュラムの活動を支える中心的な空間を位置づける。この地区・街区スケールでのパブリックスペースの配置は、骨格軸の交点などに配置され、キャンパス全体の重要なコア空間としての性格を持たせることができる(図2)。

(3)建築群・建築単体／建築群・建築単体のスケールを考える時に重視されることは、特に配置計画において学生・教員・来訪者が交

流できるパブリックスペースで建築内部と外部空間を連続化させることである。

施設を単体に扱うのではなく、①キャンパスの骨格軸からの壁面後退やビジュアルコリドールのためのセットバックと

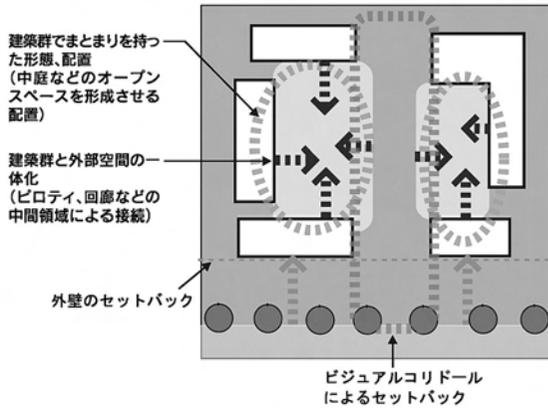


図3 建築群・建築単体のガイドライン

いった遠景を確保するための建築形態のコントロール、②パブリックスペースの連続性を確保するために、ピロティや回廊などの中間領域による接続を行ない、建築群と外部空間を一体化、③建築群でまとまりを持たない形態、配置を実現するために、中庭などのパブリックスペースを形成することが必要である(図3)。

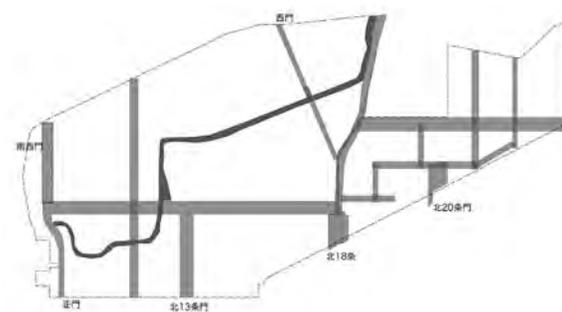
の誰もが使える公共的な場所であるパブリックスペースがもう一つの中心となるのである。CMP2006では、魅力的な特徴を持ったパブリックスペースをキャンパス内の大きな骨格として整備していくことを一つの戦略としている。パブリックスペースの整備を充実させることで、キャンパスに立地する建築群と外部空間との間に強い連関構造をつくることができ、施設単体がばらばらな状態から強く統合されたキャンパス空間を構成し、キャンパス全体で様々に行なわれる活動のニーズに対応した場が生まれ、それぞれの活動を活性化することができる。

四 パブリックスペースを整備する上での問題点

キャンパスライフを支えるパブリックスペースは、建築内部と屋外の両方のオープンスペースが主体となることが必要で、しかも人間中心の場であることも重要な視点であることから、一般的な課題として、①パブリックスペースが、キャンパスの必須空間として十分に位置づけられていない、②車、自転車、人の動線が混在している、③屋外オープンスペースと建物の関係が明確ではない、といった三つの課題が存在する。

五 スケールに応じた配置のガイドライン

上記の課題に対応してパブリックスペースの整備を充実させるために、施設の配置、土地利用、環境保全に対して三つの異なるスケールで組み立てるという方法をCMP2006で採用した。三つの



パブリックスペースをキャンパスの骨格軸として位置づける

図1 キャンパス全体スケールのガイドライン

スケールで考えることで、パブリックスペースを明確に位置づけ、計画していくことが可能になる。

(1)キャンパス全体／まずキャンパス全体に対してその空間構成の骨組みとなる骨格軸をパブリックスペースによって形成する。

六 ガイドラインに応じた整備と活用

上記のような三つのスケールによるパブリックスペースの位置づけを行い、全体を表わしたものが図4である。その中から具体的空間イメージとその中身を紹介する。

六―一 ファカルティハウスとその周辺の環境整備

建築が立地する周辺環境が、キャンパスとして保全継承されるべき自然資源が豊富な部分であることから、①キャンパスの環境再生と建築とを両立させる、②建築の平面計画や配置計画でランドスケープを構成する、③キャンパス計画における位置づけに適合させた施設機能とコントロールを行なうという三つの項目に配慮された計画・設計が行なわれた。

①キャンパスを縦断する再生された河川に対して大きな開口部を持ち、河川沿いに広がる豊かな河畔の生態とそこにアクセスできる遊歩道での活動をレストランから眺めることができること、②前面道路から玄関までが大きくセットバックしてその間に水面を持った中庭が配されていること、③建築も中庭に開いた開口部を持ち、訪れる人々の気配が感じられ、また訪れる人には、中での活動が見えるア

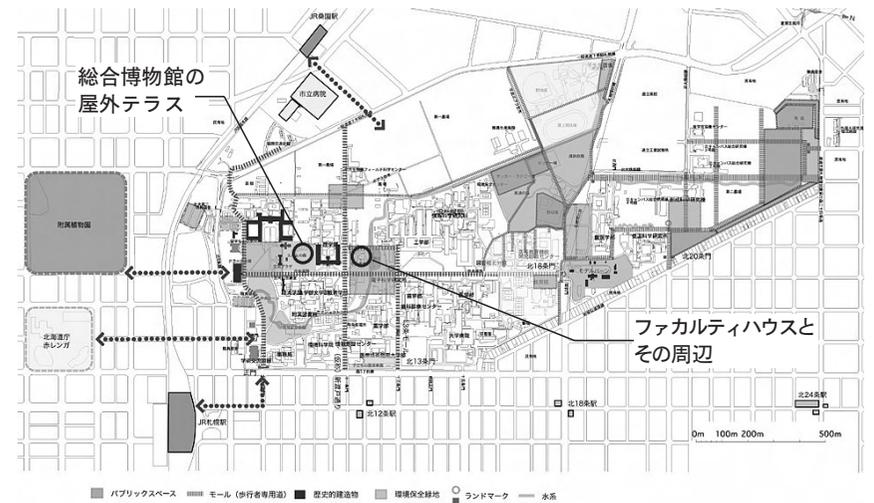


図4 パブリックスペース拠点整備計画



写真1 中庭から見たファカルティハウス

プローチ空間の連続性があることなど、外部空間と建築とが緊密に接続されている。

ここでは、物的な要素による内部と外部を接続という計画・設計上の手法により、様々な活動が展開され、またそれらの交流が発生するようなパブリックスペースが生み出されている(写真1)。

六―二 総合博物館の屋外テラス

施設整備と同時に、パブリックスペースを整備して行くとするのが上記の事例であったとすると、既存施設に対して付加的な機能を設けて、施設と外部空間の関係性を高めながら、良好なパブリックスペースを形成していこうとするのがこの事例である。

一九二九年(昭和四年)に建設された鉄筋コンクリート三階建ての理学部本館は、学内で歴史的建造物と位置づけられているが、現在は、総合博物館として内部改修が施されて利用されている。この建物の南側は、エルムの森と呼ばれる開学当時のランドスケープを残すオープンスペースで学生、教職員、また大学への来訪者にとっての憩いの場の一つになっている。

この総合博物館のエルムの森に面する部分につくられた木製の屋外テラスは、総合博物館が主催するコンサートやイベントなどが展開される屋外ステージとしての機能を持つ。総合博物館の活動が外部に示されると共に、ジンギスカンパーティなど単純なレクリ



写真2 総合博物館の屋外ステージで催されるコンサート

エーション活動しか行なわれていなかったエルムの森に対してより文化的な活動の発信を行なうことができるようになり、大学キャンパスのパブリックスペースとしての機能をより充実させている（写真2）。

七 パブリックスペースを活用するためのマネジメント

今まで述べてきたことは、大学の施設を利活用するときにはパブリックスペースを創り出すという視点の重要性・必要性とそれを整備する時の考え方である。パブリックスペースをつくりだすことによって、大学における様々な活動が誘発される。しかし、パブリックスペースを整備すれば、そのような活動は自動的に湧き水のごとく展開されるのかという点とそういうことではない。どのように活用するのかというソフトの構築をし、パブリックスペースをマネジメントしていく視点が重要となる。そのような視点として以下の二事例が注目される。

七― キャンパス・エコ・ミュージアム構想

CMP96で保存建物になっている理学部の本館を利用して、一九九九年に全学的な学術資料の集約とその情報を学内外に発信提供するために総合博物館が設置された。総合

博物館では、学術標本の展示、大学の研究活動の特徴の紹介を行っているが、それ以外に、学生向け教育プログラムの実践、学芸員実習、総合博物館活動に関するボランティアの育成といった展示以外の人材育成活動を行なっている。

この中で、大学のキャンパスを教材として生育する植物や歴史的建造物、さらには、保全・継承されている自然資源エリアなどを利活用した観察や実習が行なわれており、観察ルートなどが設定されている。このような活動を通じて、キャンパス全体がミュージアムであるとするキャンパス・エコ・ミュージアム構想が、CMP2006の中で持続的発展を支える大学としての経営的視点という位置づけで盛り込まれている。

パブリックスペースを整備するというハードからの視点ではなく、キャンパスが持つパブリックスペースをどのようにに活用するのか、その時に大学の研究・教育活動にどのように関係づけるのかという点を具体的な活動として位置づけている。

七― キャンパスビジットプロジェクト（HCVP）

大学を訪れる人々（高校生、その保護者、高校関係者及び一般市民）に北海道大学の魅力を伝える活動を、北大生だけではなく教員や職員と共に行なう組織である。主に構

内のキャンパスツアーの企画・ツアーのガイドを行ない、その他にも訪れた方々に大学の紹介・説明を行うなどの活動を展開している。

この活動が立ち上がった背景には、北海道大学に入学を希望する高校生等に大学の魅力を感じてもらおうことと、地域住民への大学の理解といった大学がおかれた社会状況がある。しかし、この活動の注目すべきところは、ツアーコースに多くのパブリックスペースが含まれていることである。施設の中身を見せるだけでなく、キャンパスの中に保全されている屋外のパブリックスペースが訪れるスポットとして重要な意味を持っていることである。

さらに、実施体制を学生、教員、職員の三位一体で構成運営していることである。教員は、ガイド育成のために一般教育演習という科目を開講し、コース設計を行ないながら協調的な問題解決能力を習得させる。学生は実際に設計したコースのガイドを行なうが、ツアーの申し込み受付や各施設への見学依頼の許可などの手続き関係は、職員が受け持つ。このように、物的な空間とそれを活用するためのシステムが複合化されて組み立てられていることで、施設建築群と屋外空間とを相互につなぐ活動がセットになった活用のされ方を示していると言える。

八 今後の大学施設の利活用に向けて

以上のように見てくると、大学キャンパスで本来行なわれるべき活動は多様化の方向を示しており、同時に本来その利用を目的にしてつくられていた学生や教職員だけではなく、地域住民やその他の来訪者も含めて施設利用の想定がなされる必要があることがわかる。また、大学キャンパスという大きな規模を持つ空間が都市の中に立地するという点からすれば、大学キャンパスは、都市における緑地空間であったり、都市公園的な意味を持つ都市施設としての重要な役割も持っている訳で、その中にある大学施設も自ずとこの位置づけに関連した役割を持つという側面を無視はできないであろう。

このような中で、今後考える必要があるのは、大学と地域が共に持続的な発展を進めるといふ視点から、施設の整備・利活用・維持管理を考えていく必要があるということである。学生、教職員、市民、企業、行政といった多様な主体を巻き込んだ利活用のプログラムを大学全体として考える時期に来ているのではないだろうか。